

近年における内科学の進歩はめざましく、その包括する範囲はますます大きくなっている。かつては2冊もしくは3冊の部厚い本におさまった内科学という学問は、簡略に記載しても4冊以上のボリュームとなり近い将来には5冊にも6冊にもしないと教科書として完璧を期することができなくなっている。

このことは内科を専門とする者に大きな負担となっているのみではなく、内科学では何からはじめて何を要領よく学んでゆくかということが重要な課題となっている。まして、いわんや卒後の研修に励む医師や、在学中の医学生にとっては、内科学はその巨大さにおいて、まず圧倒される思いのする学問のように感じられることだろう。

しかし内科学は臨床医学における扇の要めに当り、臨床と基礎とを結び接点の位置を占め、医学を学ぶ者が避けて通ることは許されない。

「新臨床内科学」は内科を学ぶ者のこのような悩みに応えるものである。ことによ

□ 書 評 □

「新臨床内科学」

〔編集〕 阿部 正和 岡部 治弥
日野原重明 田崎 義昭
本間 日臣 高久 史磨

〔執筆〕 専門医 133 氏分担執筆

大阪大学教授
山村 雄一

の内容の新鮮さと、具体的な有用性においてすぐれている。一つ一つの疾患や症候群について独立して読んでもわかりやすく、さらに少し突込んで理解したいと思うときには総論を読めばよい。またその逆に読んでもよいように編集されている。ことに全体の総論である診断と治療の総論、診療録作成とその方法の部は一読をすすめる。

アメリカでは Current Diagnosis and Treatment という医学書が版

を重ね医学生や内科医の参考書として愛用されている。わが国においても、このような書が要望されていたのではないか。その意味でも本書がつつぎに新しい知識を取り入れて版を重ねることを期待したい。

最後に一、二の気づいた点を指摘すると、執筆者によって濃淡さままの記載が行なわれているので平均化して欲しいこと、簡略化のために難解なところがあるので、総論その他で補って欲しいこと、水と電解質の障害は代謝と栄養疾患の項目に入れた方がよいのではないか、などである。

それにしてもベッドサイドで多忙な診療に追われる医師や、早期にベッドサイドで実地教育を受けている医学生にとって、本書は座右の書として役立つことであろう。疾患を理解し、診断と治療の方針をつかみとるのにきわめてわかりやすく、かつ便利だからである。

B 5 頁866 図105 写真10
¥ 8,500 千 300
医学書院刊